鶴見大学紀要，第55号，第3部，67-73，2017.

教材としての神沢利子『くまの子ウーフ』

－幼児教育・小学校教育の視点から－

A Study on “Kumanoko Uhu” by Toshiko Kanzawa for Teaching －Early Childhood Education and Elementary Education－

山田　吉郎
Yoshiro YAMADA

序

児童文学作家神沢利子の初期の代表作『くまの子ウーフ』は、幼児教育や小学校教育でも取り扱われ、幼年童話の名作として広く知られている。くまの子のウーフを主人公とする九篇の物語を収めた単行本『くまの子ウーフ』がポプラ社より刊行されたのは昭和44年6月のことであるが、その後、続篇や絵本化されたものも出版され、現在まで読まれつづけている。本稿では、『くまの子ウーフ』九篇のうち小学校国語教科書にも採用されている「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」を取り上げ、その幼年童話としての特質と構造を分析したのち、幼児教育・小学校教育における活用のあり方を考察することにしたい。

1　『くまの子ウーフ』の構造と特質

童話集『くまの子ウーフ』の「まえがき」を次に引く。(なお、本稿における『くまの子ウーフ』の本文の引用は、昭和44年6月、ポプラ社発行の初版による。)

> ぼくは　くまの子／うーふーって　うなるから、／名まえが　くまの子　ウーフ。／あそぶのが　だいすき、／なめるのと　たべるのが　だいすき。／それから／いろんなことを　かんがえるのもね。／どんなことかって？／うーふー　さあ、よんでみてくれよ。

主人公のくまの子のウーフは、遊ぶのとなめるのと食べるのが大好きであり、いかにも幼児の典型的な特質を備えている。が、それに加えて、「いろんなことを　かんがえる」のも好きだと記されている。すでに神沢利子童話の特質として定評となっている思考性、論理性がこの主人公ウーフに付与されている点は重要である。その意味でウーフは、幼い存在ながら事象の観察者としての一面が見られる。ただ、前もって留意すべき点を述べておけば、その観察から思考に導かれる発端となるものには、感覚や感情、意志の動きが意外に多いという点である。木谷喜美枝がすでに指摘しているように、「なんにも知らないウーフが知ってゆくのだが、それは〈感性〉が知るのである。〈理性〉が賢しらに知識を求め、物事の原因、理由をつきとめているのではない。」[注1)] ということである。その意味で、幼年童話『くまの子ウーフ』の世界を、あまりに論理的思考性を重視する形で捉えてしまうのはやや疑問であり、先の「まえがき」でも触れられていたように、あくまでも「うーふー」とうなり、「あそぶのが　だいすき」で「なめるのと　たべるのが　だいすき」という感覚や感情の動きの上にウーフの観察者としての眼は得られているのである。

さて、童話集『くまの子ウーフ』は、先にも述べたように九篇のウーフを主人公とした童話より成り立っているが、その詳細を示すと以下の通りである。

1「さかなには　なぜ　したがない」
2「ウーフは　おしっこでできてるか？？」
3「いざというときって　どんなとき？」
4「きつつきのみつけた　たから」
5「ちょうちょだけに　なぜ　なくの」
6「たからが　ふえると　いそがしい」
7「おっことさないもの　なんだ？」
8「？　？　？」
9「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」

以上の九篇の表題を眺めわたすと明らかなように、「さかなには　なぜ　したがない」「ウーフは　おしっこでできてるか？？」をはじめとして、疑問文の形の表題が九篇中の七篇に及んでいる（八篇目の「？　？　？」も含む)。つまり、作者が前掲の「まえがき」で述べていたような「いろんなことを　かんがえる」のが「だいすき」なウーフの特性がその表題にも如実に示されているのである。

このように、童話集『くまの子ウーフ』の世界においては、作者神沢利子自身によって主人公ウーフの思考性が前面に押し出されている感があるが、そうした面のみならず、『くまの子ウーフ』の童話世界の魅力を多角的に捉え、その作品構造を明らかにしたいと考えている。が、その作品

〒230-8501　横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科
Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-ku, Yokohama 230-8501, Japan.

世界は掲出の表題からも明らかなように多彩であり、本稿においては作品内容もやや複雑で小学校国語教科書にも取り上げられている最終話「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」に焦点を絞って分析と考察を試みることにしたい。

2　「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」の作品世界－前半部をめぐって－

本章では、童話集『くまの子ウーフ』の最終話（第九話）である「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」の作品世界の特質を具体的に分析してゆくことにする。

まず、物語の基本的な状況設定を確認する意味で、冒頭部を引く。（なお、物語の原文はほぼ総ルビであるが、本稿での引用にあたっては原則として省くことにする。）

おてんきの日が、つづきました。

いく日も、雨がふらないので、どこのうちでも水がなくてこまりました。小さな井戸は、すぐ水がかれてしまったのです。

けれど、ウーフの家では、去年、ふかい井戸をほって、モーターで水をくみあげていたので、つめたい水がたくさんでました。

ウーフの家に、きつねも、やぎも、りすも、みんながばけつをさげて、水をもらいにきました。

このように、物語世界は一種の危機的状況が設定されている。ここには、干ばつによる水不足の深刻さが見られ、小さな井戸も涸れてしまい、皆がウーフの家の深い井戸を頼りにしている様子が語られている。何気なく書かれているが、ウーフの家が近在の中で特権的な位置にあることに目をとめておくことは必要であろう。きつね、やぎ、りすをはじめ近在にすむ動物たちは、ウーフの家の井戸を頼りにしているわけで、ウーフの家と近在の動物たちとの間には心理的に一種の緊張関係があると言ってもよいであろう。このことがのちの物語の展開に影を落としてゆくことになる。

冒頭の状況設定ののち、物語は主人公のウーフへと視点が置かれ、林を歩いてゆくウーフの見聞が語られることになる。そこでは、水不足で弱っているかたつむり、かにと出会うが、その場面は幼年童話でしばしば用いられる同質のエピソードの反復という形式で、歌謡的要素を織り込みながら語られてゆく。試みにかたつむりとの出会いの場面を見てゆこう。

ウーフは、かたつむりをつつきました。けれど、かたつむりは、歩くのもうごくのもいやになったらしく、からのおくにひっこんददてこようとしませんでした。

おくのほうからかすれ声で、こういうのがきこえました。

からからだ　からからだ
からも　からだも　からからだ。

「ねえ、かたつむり、きみ、水がほしいのかい。」

ウーフは、からをのぞきました。けれども、かたつむりはもう、へんじをしませんでした。

ウーフは、かたつむりをポケットにいれました。

ここでは、かたつむりがかすれ声で発する言葉を聞き（五、五、七、五音からなる歌謡的リズムがある）、ウーフは「ねえ、かたつむり、きみ、水がほしいのかい。」と声をかけた後、かたつむりをポケットに入れるのである。からからに乾いたかたつむりを助けようとするウーフの心情が見てとれるであろう。周りの動物に心やさしいウーフの心情はおのずと幼い子どもの読者の共感を誘うであろう。そして、このかたつむりの場合とほぼ同じ物語の型で「こうらが　ひびわれる。」とつぶやく道端のかにをポケットに入れるのである。こうして、ポケットにかたつむりとかにを入れて、ウーフが向かうのは川である。これは明らかに、かたつむりとかにに、水を与えて助けるためである。ここまでは主としてウーフの情意がはたらいていると言えよう。

これに対して、次の川の場面が印象的である。ここでは、狐のツネタと、その父親、それにツネタの弟たちが忙しく働くさまが描かれている。

ウーフが川へやってくると、「ねじりはちまきをしたきつねのおじさん（論者注ーツネタの父親）が、両手にさかなのはいったばけつをさげて、かけて」きたのである。そして、川にはもう水がないことを告げる。

「水がないって、かたつむりや、かににやる水もないの。」

と、ウーフがたずねました。

「ああ、ない、ない、ないね。さあ、どいたどいた。」

おじさんは、ウーフのかたをちょいとおしてから、ばけつをさげたまま、

「あらよー。」

と、かけていきました。

これは、水がなくなった川で魚が取り放題となり、このことに着目したツネタの父が、「ひともうけ」しようと大わらわで魚を町へ売りに行く場面である。この父の立ち去ったあと、ツネタとその弟たちもバケツをさげて「あらよー。」と忙しく駈けてくるのである。

このように「ひともうけ」する話をするツネタたちに対して、ウーフは、「や、そんなら、ぼくもするよ。」と言うと、ツネタは「だめ！」とどなり、「ここのやつは、もうみんな、ちゅうもんとってあるんだからな。この川は、ぼくのなわばりさ。ウーフは、帰れよ。」と言い放つのである。そして、ウーフは「へえ、ずるいの。」とつぶやきながら帰途につき、心の中で、

（ツネタくんのうちでは、水がないからってぼくのうちに水もらいにくるのにな。ただなんかであげて、そんしちゃうよ。こんどから、ばけつ一ぱい百えんにして、もうけようかなあ。）

と、思うのである。

この場面は、さまざまな視点から考察できる。ツネタたちが川の魚に着目し、いち早く商業的な立案と実行をなしとげた姿があり、一方でその事業に加わりたいと言ったウーフに対してその参加を拒否するツネタたちの態度がある。

この前者に関しては、ツネタ一家の働きぶりにはやや荒っぽい印象はあるものの、ツネタや幼い弟たちまでが力を合わせて魚を運んでいるさまには一種の躍動感が感じられる。現代的な視点から見れば起業家的な着想と実行力に富んだ家族だと見られなくもない。一家がねじりはちまきをして魚を入れたバケツを運ぶ姿は、この一篇の中で最も躍動的な部分だと言ってもよい。

しかしながら、後者のウーフとツネタとのやりとりは、ウーフの思考をうながすところであり、本作品のウーフの思考の糸の発端となるところでもある。ツネタたちの「ひともうけ」する話を聞いて、ウーフが気安く「や、そんなら、ぼくもするよ。」と言ったのに対し、ツネタがつよく「だめ！」「ここのやつは、もうみんな、ちゅうもんとってあるんだからな。この川は、ぼくのなわばりさ。ウーフは、帰れよ。」と拒否するのは、自分たちの先取性、先見性を表明したものとしてそれなりに理屈は通っているようにも思える。が、その突き放したツネタの口調がウーフの心の中に不服の思いを生じさせてゆくことになるのである。

そのウーフの不服の思いは「へえ、ずるいの。」というつぶやきにあらわれている。この「ずるいの。」というウーフの感想には、そう単純ではない奥行きがある。その場のやりとりだけ見れば、ツネタが「この川は、ぼくのなわばりさ。」といった独り占めに対する不服の感情があるだろう。川を特定の者のなわばりとは言えないからである。だが、帰り道でのウーフがめぐらす思いはさらに重要である。先にも引いた「ツネタくんのうちでは、水がないからってぼくのうちに水もらいにくるのにな。ただなんかであげて、そんしちゃうよ。こんどから、ばけつ一ぱい百えんにして、もうけようかなあ。」というウーフの思いは、自らの家とツネタの家との損得の比較へと踏み込んでいる。「この川は、ぼくのなわばりさ。」と言って川を専有しようとするツネタたちに対し納得のいかない気持ちがあらわれていたと思われるが、そのツネタの家のやり方への不服が、ウーフの家との比較からあぶり出されてくるのである。そのウーフの思いは当然でありながら、そこには一脈ウーフのエゴイズムの動きも透けて見える。その意味で、この場面は、ツネタの論理よりも、ツネタの論理を受けたウーフの反応の尺度の変化の方がより興味深いと言えよう。とくに、ツネタの家からウーフの家に水をもらいに来るのが「ただ」（無償）である点に着目し、それでは損をしてしまうと認識し、「こんどから、ばけつ一ぱい百えんにして、もうけようかなあ。」と思考を展開するのである。

こうしたウーフの思いの展開をどのように捉えればよいのであろうか。たとえば大人の思考の展開と論理性をそのままにあてはめるわけにはいかないように思われる。ウーフは人間で言えば幼児ということになるのだろうが、このウーフの身の周りのできごと（事象）への反応の仕方について、その特色を考慮すべきであろう。この点に関連して、岩崎京子は、ポプラ社文庫『くまの子ウーフ』（昭和52年5月）の「解説」で次のように述べている。

> 小さな子ども（ウーフのような）の口から出てくるおしゃべりは、そのまま詩です。純粋で無邪気で、思わずほほえまされたり、時にはずばっと直截にものの本質をついて、まわりのおとなどもをはっとさせることがあります。その子どもたちが、時と共にいろんなことを覚えていき、そのうち、「たまごはよくまちがえてほかのものを出さないなあ」などいわなくなってしまいます。知識がふえことばがふえ……、それが成長というものですが、その子の心は逆に常識的になり、考え方も固定していって、一まわりも二まわりも小さくつまらなくなってしまいます。だれだって、むかしはウーフのように天使だったはずなのに……。[注2)]

ここで岩崎が述べていることは、幼児の口から出てくる言葉は、純粋で無邪気でありつつ、時としてものの本質をつくものであり、ウーフの言葉にも同様のことが言えるということである。つまり、前掲のツネタとのやりとりに目を向ければ、ツネタが川の魚を独り占めにし、自分のなわばりと主張する言葉に対して「へえ、ずるいの。」とつぶやくのも素朴で純粋な反応であり、その後、帰り道で「ツネタくんのうちでは、水がないからってぼくのうちに水もらいにくるのにな。ただなんかであげて、そんしちゃうよ。こんどから、ばけつ一ぱい百えんにして、もうけようかなあ。」とつぶやくのも、やはり素朴で自然な反応なのである。前者には川を独占しようとする者への不満があり、後者にはツネタの家と自分の家との損得勘定の意識が認められる。そこには、統一した言動を要請される大人の尺度から見れば、それぞれの言葉の出てくる思考の枠には揺れが見られるが、ウーフはそれぞれの情意、思考の展開の中で、どちらもおのずからに発したものと捉えるべきなのであろう。つまり、矛盾や不統一をはらみながらも、それぞれの時と場における素朴で自然な反応が、むしろ読者に直截な、ものの本質をついた言葉としてひびくのであろう。

なお、ここで留意しておかなければならないことは、ウーフとツネタは互いに反発する位置にありながらも、作者は決してツネタを否定はしていないという点である。たしかに少々意地悪く利己的な点はあるものの、むしろ弟たちとともに魚をバケツで運ぶなどエネルギッシュな情意の動きが生き生きと描かれており、やはり幼い子どものもつ特性の一端が写しとられているとも言えるであろう。ちなみに作者の神沢利子は前出のポプラ社文庫『くまの子ウーフ』の「あとがき」で、

> 今でも「くまの子ウーフくんへ」という子どもたちからのてがみがまいこむことがあります。わたしは、みんなに愛されるウーフをしあわせなくまだと思っています。それからツネタもなかなかすてきなきつねだと自分では思っているのです。[注3)]

と述べている。つまり、少々意地悪で独り占めしたがるツネタも、子どもの成長過程の様相を反映しているものでもあり、たとえば保育の現場ではしばしば見られるものである。そのようなツネタの子どもとしてのありようを、むしろ愛おしむように見守る作者の視点がそこにはあると言えるであろう。見方によっては、少々腕白なツネタの方に現

実に存在する子どもの姿が重ね合わされているとも言えるわけで、くまの子ウーフの方はむしろ理性と情意の動きが透けて見えるように鮮明に表象化した存在であり、作者神沢利子の造り出したある種の理念化された主人公像であるとも言えようか。一種の感受体としてのウーフのあり方がそこにはかいま見られるようにも思われる。

3　「くまーぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」の作品世界ー後半部をめぐってー

ウーフが帰宅したところから新しい展開がはじまる。起承転結の転にあたるが、そこではウーフの家の井戸水をくみあげるモーターが故障してしまっている。母親から、「おとうさんが、町に、しゅうりやさんをたのみにいったのよ。水がないから、ミミちゃんのところから、もらってきてね。」と頼まれたウーフは、「かたつむりもかにも、もうすこしまつんだよ。いま、水をもらったげるからね。」と言いながら、バケツを持ってミミの家へと向かってゆく。

ところが、そこでウーフのすぐ後から水をもらいにやってきた、りすのキキとねずみのチチが、ウーフに向かって文句を言い出すのである。りすのキキは、ウーフの携えてきた大きなバケツを見て、「こまるよ。そんな大きなばけつじゃ、ミミちゃんちの井戸は、小さいんだもの。ぼくらのぶんがなくなるよ。」と言い、ねずみのチチは、「そのばけつは、ぼくらの百ぱいぶんだよ。」と言う。そして、キキは「こまるなあ。くまなんか、いつもそうなんだ。」と一般論化し、「山にいちごがなったって、かきやくりがなったって、くま一ぴきで、ぼくらの百ぴきぶんたべちまうんだ。」と評するのである。その際、りすのキキの様子について「ウーフが、子どものくまだからか、いばっていいました。」と記されているように、キキはウーフに向かってだから言えたのであって、おそらくウーフの父親を前にしては言えない言葉だったであろう。しかし、それゆえにこそ森の動物たちの本音があらわれているとも言えるようである。りすも含め森の動物たちの多くはウーフの家の井戸から水をもらっていたわけであるが、りすの前掲の言葉にはその裏側にある感情がにじみ出ているとも言えそうである。

しかしながら、こうした非難の言葉に対してウーフのとる態度は先ほどのツネタたちとの会話の場面と同じく、やはり表に出る反発の形はとらない。「いいよ、そんなら、いらないや。かたつむり一ぴきぶんと、かに一ぴきぶんの水だけもらうよ。」と言って、かたつむりとかにに「水をたらっとかけて」やるだけで、「ありがとう。さいなら。」と立ち去ってしまうのである。ウーフは相手の強い言葉に対して、強い反発を表に出すことはなく、その言葉を自らの心の内に引き入れて自問自答するのである。先ほどのツネタや、この場面でのりすのキキ、ねずみのチチたちのやや意地悪に放たれた言葉に対して、ウーフは決して即座に反発の言動に出ることはない。投げつけられた相手の言葉を一度自らの心の内に引き入れて自問自答する時間をもち、そののちにおのずと自らの言葉が立ち上がってくるのである。この一定の時間を付与されて、感じ思考する形式が主人公ウーフに独特の奥行きを与えているのである。

ともあれ、ミミの家でのウーフの行動は、所期の目的の半分が充たされたものである。かたつむりと、かにに、水を与えることはできたものの、母から頼まれた生活のための水はもらうことができてはいない。しかしながら、この母からの依頼を果たせなかったことについては、この物語では不問に付されている。あたかも予定調和のように、ウーフが帰宅すると、タイミングよく修理屋がモーターを直し、元どおり水が出るようになっていたのである。したがって、これ以降、物語の焦点はりすのキキやねずみのチチから投げつけられた言葉を、ウーフがどのように受け止めるかという点に絞られてくることになる。つまり、この物語の表題である「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」という問いかけがなされてゆくのである。

このウーフの問いは、父親に投げかけられる。「ねえ、おとうさん、くまなんかたべるのものむのも、ねずみの百ぴきぶんだって、山のかきもくりも、くま一ぴきで百ぴきぶんたべちゃうって、ねずみのチチがおこるんだ。でも、ぼく百ぴきぶん、のどがかわくよ。百ぴきぶん、おなかすくよねえ。」と問いかけたのに対して、ウーフの父親は、「のどがかわいたかい。もう、水がでるよ。さあ、のみなさい。それから、ほかのひとにもわけてあげようね。」と答えている。しかし、この父親の答えは、必ずしもウーフの問いかけに対する直接の回答にはなっていない。

そして、さらにこの問いを持ち続けているウーフに納得の思いをもたらすのは、それから三日目に雨が降り、五日目に晴れた後のウーフと父親の会話においてである。有名な場面だが、次に引いてみる。

「おとうさん、どこへいくの。」
と、ウーフがたずねました。
「ミミちゃんのうちで、あつまりがあるんだよ。こんどから、水でこまらないように、貯水池をつくろうって、そうだんするんだよ。」
「どこにつくるの。ねえ、それ、みんなでつくるの。おとうさんもはたらくの。」
「そうだよ。」
と、おとうさんがこたえました。
「おとうさんはちからもちだからな。ウーフ。」
「ねずみの百ぴきぶんよりも！」
と、ウーフがさけびました。
「くまは百ぴきぶんたべるから、百ぴきぶんはたらけば、いいんだ。そうだね、おとうさん。」

「ねずみの百ぴきぶんよりも！」と思わず叫んだところに、ウーフの新たな認識と納得の心情が見てとれる。それまでねずみの百ぴきぶん食べてしまう自分という存在に対して肯定感を抱きかねていたウーフが、自らの肯定へと至る理屈を見出したのである。「くまは百ぴきぶんたべるから、百ぴきぶんはたらけば、いいんだ。」という論理に至りついたのであり、読者の子どもたちにも分かりやすいであろう。ただ、この論理を語るのはくまの子のウーフ自身であ

り、主体はあくまでも子ども自身である。周りの者はその気づきをうながす役割を担うという構図がはっきりとうかがわれ、この点では幼児教育の現場のあり方と繋がるところがあるであろう。

さて、右のような自己肯定の思いに至りついたウーフの心の晴れやかさを、さらに鮮明に定着させるのが、この物語の終結部である。虹が美しくかかり、ウーフのおとうさん、おかあさんが見上げるラストシーンは印象的である。そして、こうしたラストシーンを支えているものが、ウーフの父親がウーフに語り聞かせた次の言葉である。

「いいんだよ。ねずみは、ねずみ一ぴきぶん、きつねはきつね一ぴきぶん、はたらくのさ。だれのなんびきぶんなんかじゃないんだよ。おとうさんはくまだから、くまの一ぴきぶん。ウーフなら、くまの子の一ぴきぶんさ。みんなが一ぴきぶん、しっかりはたらけばいいんだ。や、にじがむこうの上までかかったよ。」

この父親の言葉は、先のウーフの「くまは百ぴきぶんたべるから、百ぴきぶんはたらけば、いいんだ。」という言葉を受けて発せられたものである。この世界に生きるすべての者のあり方を肯定しようとする言葉であり、おそらく読者の子どもたちを納得させるものであろう。（なお、このウーフの父親の言葉は、つきつめて考えれば、たいへんに深く難しい内容をはらんでいると思われる。）

以上、『くまの子ウーフ』の一篇「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」について、プロットに沿いながら、その作品構造の特質を考察した。

4　「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」と幼児の受容

今まで「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」をめぐって作品世界を分析してきたが、それではこの作品は幼児教育の教材としてどのような特色を有しているのであろうか。その際、この作品の読み聞かせが子どもの心にどのように受け入れられてゆくのかを考察する視点と、読み聞かせを聞いた子どもに対してその活動の発展としての遊びの展開（たとえば劇あそびや水を扱った遊びなど）へ繋げる視点があるが、小稿では前者の視点に立って考察したい。

さて、一般に幼児向けの物語に見られる特色としては、次のような要素が指摘できよう。すなわち、瀬田貞二『幼い子の文学』（昭和55年1月、中公新書）が提唱していた「行って帰る」物語構成をはじめとして、同質のエピソードの反復、歌謡的要素、オノマトペの多用、適度な空想性、食べ物のモチーフなどがあげられよう。さらに、数あそび、ひとりぼっちの境遇なども、幼い子ども向けの物語に多く取り入れられている要素であろう。

「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」の作品世界を見てゆくとき、「行って帰る」構成については、ウーフが川やうさぎのミミの家へ行って帰る点が指摘できる。いずれもウーフが、ツネタやねずみのチチから文句を言われ、疑問を心に抱きながら帰ってゆく姿が描かれている。その疑問はウーフの心の中にひっかかり、その答えを得ようと問いつづけてゆく。その意味で、行く前のウーフと帰ってきてからのウーフには明らかな違いが見られ、それが子どもにとっての成長とも言えるであろう。そのウーフの思考と行動のパターンは幼い子どもにとって普遍的なものでもあり、子どもの読者に自然に受け入れられるであろう。『くまの子ウーフ』の物語では、ウーフがどこかへ出かけ、ある事象に出合い、考えながら帰って行くパターンが指摘でき、帰り道の場面はとくに重要であるように思われる。

次に、同質のエピソードの反復についても、かたつむりやかにとの出会いの場面に見られ、反復によって次はどのようになるのだろうかという期待感が高まり、やはり幼い子どもにとって受け入れやすいものになっている。そして併せて、かたつむりの「からからだ　からからだ／からも　からだも　からからだ。」というア音を多用したリズムある歌謡的フレーズも、子どもの心になじみやすいものとなっている。

このほか注目したいものとしては、数あそび的な要素やひとりぼっちの境遇などの設定があげられよう。ひとりぼっちの要素は、おのずとウーフの帰り道でめぐらす思考とも繋がっている点で注目され、また数あそび的要素は、物語の表題自体にかかわっており、子どもの注意をとくに引きつけるであろう。この数あそび的要素について、以下やや立ち入って考えてみる。

この作品で数の問題が描かれるのは、次のような場面である。

・ウーフはツネタたちから川へ行くことを拒否され、帰り道で、「ツネタくんのうちでは、水がないからってぼくのうちに水もらいにくるのにな。ただなんかであげて、そんしちゃうよ。こんどから、ばけつ一ぱい百えんにして、もうけようかなあ。」と思う場面。
・ウーフがうさぎのミミの家へ水をもらいに行くと、りすのキキやねずみのチチが、ウーフの持っているバケツは「ぼくらの百ぱいぶんだよ。」と文句を言い、ウーフは「いいよ、そんなら、いらないや。かたつむり一ぴきぶんと、かに一ぴきぶんの水だけもらうよ。」と答える場面。
・家へ帰ってきたウーフが、おとうさんにねずみのチチの言葉を告げ、「でも、ぼく百ぴきぶん、のどがかわくよ。百ぴきぶん、おなかすくよねえ。」「ぼく、ねずみにもりすにも、水がほしいといったら、あげるよ。でもね、きみ一ぴきでかたつむり百ぴきぶんだなんて、いわないぞ。」と言う場面。
・結末に近く、「それから、三日めに、雨がふりました。」「雨がふりつづいて、五日めにはれました。」と語られる場面。
・終結部において、ウーフが今までの疑問が拭い去られた晴れやかな声で、「くまは百ぴきぶんたべるから、百ぴきぶんはたらけば、いいんだ。そうだね、おとうさん。」と言い、おとうさんが、「だれのなんびきぶんなんかじゃないんだよ。おとうさんはくまだから、くまの一ぴきぶん。ウーフなら、くまの子の一ぴきぶんさ。みんなが一

ぴきぶん、しっかりはたらけばいいんだ。」と答える場面。

このように見てくると、「三日めに、雨がふり」「五日めにはれました。」という場面を除くと、そのほとんどが一と百の対比であることが分かる。これは幼い子どもにとってきわめて分かりやすい対比である点が重要であろう。むろん、りすのキキやねずみのチチのちょうど百倍くまの子ウーフが、水を飲むわけではなく、きわめて多いことの指標として百という数字が使われている。しばしば言われるように幼い子どもにとって、「とても多い」「とても少ない」という表現ではなく、具体的数字を示すことによって新鮮な印象を与えることができるわけであり、そのような幼児の特性をふまえた上での表現であるとも言えよう。そして、一と百との対比は最も鮮烈な対比であり、その対比がウーフとキキやチチ、またウーフと父親との会話の中で波が寄せ返すようにくり返される手法にこの作品の特色があると言えるであろう。

以上、行って帰る構想や、同質のエピソードの反復、歌謡的要素、数あそび的要素などについて考察したが、この作品は見てきたように幼児の心の動きに適応した構成と表現がなされており、そのことが幼年童話としてのこの作品の輪郭を鮮明にしているのである。そして、このような諸要素をふまえた上で、表題として掲げられている「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」というウーフの根本的な問いと、おとうさんの「だれのなんびきぶんなんかじゃないんだよ。おとうさんはくまだから、くまの一ぴきぶん。ウーフなら、くまの子の一ぴきぶんさ。みんなが一ぴきぶん、しっかりはたらけばいいんだ。」という回答が響き合い、幼児の心に錘りを降ろしてゆくことになるのである。

5　小学校教科書に見られる「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」

『くまの子ウーフ』の作品はいくつかが小学校教科書に採用されているが、その際どのような配慮、工夫がなされているであろうか。本稿では「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」が収録された学校図書発行の小学校教科書を見てゆくことにしたい。

ここで取り上げるのは、平成14年2月10日発行の『みんなと学ぶ小学校こくご二年上』と、平成17年7月1日発行の『みんなと学ぶ小学校こくご二年下』である。両者ともに「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」が収録されているが、違いは「二年上」「二年下」とあるように、この童話を読む児童の年齢に数か月の差があるのである。むろんその童話作品自体に違いはないのであるが、端的に言えば読後の指導のあり方に差異が認められる。（なお、当該教科書収録の本文は、『くまの子ウーフ』初版の本文とは若干の異同があるが、大筋での変更はない。この点については本稿では詳述することは控え、機会をあらためて考察することにしたい。）

まず、平成14年発行の『みんなと学ぶ小学校こくご二年上』について見てゆく。原作との違いですぐに気づくのは、漢字・ひらがな表記の違いであるが、これは小学校教科書であれば、ある意味で当然のことであろう。このほか考慮すべきはその教材を読んだ後の指導のあり方であろう。物語本文の掲載の後に次のような課題が載せられている。

すきな　本の　ポスターを　作ろう

読書（どく）を　楽しみ、読んだ　本を　しょうかいしましょう。

「くま　一ぴき分は　ねずみ　百ぴき分か」は、くまの　子　ウーフが　出て　くる　いくつかの　お話の　一つです。ほかにも　さがして　読んで　みましょう。

学校の　図書室には、楽しい　ものがたりの　本が　たくさん　あります。すきな　本の　ポスターを　作って　しょうかいしましょう。

ポスターには、

・読んだ　本の　名前

・おもしろかった　ところ

を書きましょう。[注4)]

このような課題が出され、併せて、「わたしは　この本が　大好き。」と言って本を手に取っている女の子、「絵を　かいて　しょうかいするんだね。」と言って「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」のポスターをかいている男の子の絵が載せられている。

この読後課題は、好きな本に親しみ、その本のポスターを作るというものであり、「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」という物語に親しみ、物語のおもしろさ、楽しさを知って、さらに読書への楽しみを深めようとうながすものである。「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」という物語内容の分析にはさほどこだわらず、好きな本の紹介を、ポスター作りを通してするというところにポイントがある。そして、このポスター作りでは、「読んだ本の名前」「おもしろかったところ」を書きましょう、とあり、おもしろかったところ、言い換えれば児童が関心をもち心を惹きつけられたところを認識するような、さりげない形の指導がなされている。それとともに、国語教科でありつつポスターを作成するというところに、幼児教育（造形）とのつながりが見てとれるように思われる。児童が楽しみながら、描画という制作活動にかかわりつつ、物語の魅力を認識するような配慮である。

そしてまた、当該教科書では、実際に作成されたポスターの例が掲載されている。「ぼくは王さま」「さるかに」「ふかい森のふたりはなかよし」「「さよなら」っていわせて」という四作品についてそれぞれ児童の絵と感想、説明が載せられている。このうち、「ぼくは王さま」のポスターでは、王さまの絵の傍らに、この王さまは「べんきょうがきらい」「ちゅうしゃがきらい」「たまごやきがすき」「わがまま」「いばりんぼう」など、王さまの特徴が列挙されており、そこに物語の登場人物の要点を整理し把握させようとする指導上の配慮が見てとれる。

さらに、叙上の課題の発展として、つづけて「読もう・楽しもう　（読書あん内）」が見開きで掲載されている。

「おしいれの　ぼうけん」（ふるた　たるひ）「のはらひめおひめさま城の　ひみつ」（なかがわ　ちひろ）「ぼくたちおやこは　だいくさん」（アンネ＝マール・文　パウル＝マール・絵）「なぞなぞ　ライオン」（ささき　マキ）「ふたりは　ともだち」（アーノルド＝ローベル）など五作品が紹介文とともに提示され、さらに末尾に「だごだご　ころころ」（いしぐろ　なみこ／かじやま　としお・さい話）「ぼくの　おにいちゃん」（ほしかわ　ひろこ・しゃしん／文　ほしかわ　はるお・しゃしん）「ねずみの　つくったあさごはん」（あわ　なおこ）などの作品名が掲げられている。

以上見てきたように、平成14年発行の小学校教科書『みんなと学ぶ小学校こくご二年上』においては、作品内容の分析よりも、読書を楽しむといった児童へのうながしに主眼が置かれていたと言えよう。『くまの子ウーフ』の一篇を出発点としながら、広く読書への興味、関心を呼び起こし、その「おもしろかったところ」を発表しようという方向である。

これに対して、同じ「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」が採用されている平成17年7月1日発行の『みんなと学ぶ小学校こくご二年下』では、どのような課題が設定されているであろうか。この教科書では、本作品を読ませる時期が小学校二年生の後半期へと移行しているのであるが、先に見た平成14年発行の教科書とは若干の違いが見られる。次のような二つの課題設定がなされている。

1、かんそうを出し合う
　楽しかったばめんをえらんで話しましょう。
2、ことばを書きぬく
　おとうさんが、ウーフにいちばん言いたかったことばを書きぬきましょう。[注5)]

この二つの課題のうち、第一の課題は「楽しかったばめん」について感想を出し合うというもので、平成14年発行の教科書にあった「おもしろかった　ところ」をポスターに書き込むといった課題と類似したものであり、物語を読む楽しさに重点を置いたものと言えよう。しかしながら、それにつづく第二の課題は、「ことばを書きぬく」という国語の教科における一般的な課題である。しかも書きぬく内容は「おとうさんが、ウーフにいちばん言いたかったことば」であり、いわばこの物語の主題にかかわる部分である。この課題は、「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」という物語の要点を把握する力を問うものであり、併せてそれは題名自体が疑問形であるこの物語にひそむ回答への道筋を児童に示すものでもある。先に見た『みんなと学ぶ小学校こくご二年上』の読後課題が物語への興味・関心をうながすものであったのに対し、この「二年下」の読後課題は本格的な読解への道を開くものであると考えられる。同じ小学校二年生の児童を対象とした読後課題でありながら、二年生後半期の読後課題は、幼児教育で主目的とされるような物語を楽しむという要素だけでなく、物語の読解へと一歩踏み込むものであったと言えよう。

結

神沢利子の代表作『くまの子ウーフ』は、「さかなにはなぜ　したがない」「ウーフは　おしっこでできてるか？？」など、幼い子どもの問いかけを主軸に考えることをうながすという独特の構造を有した作品であるが、その中でも本稿で取り上げた「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」は、その問いかけ自体がこの社会のあり方への問いかけでもあるような、普遍的な問いかけの網を広く投げかけたものとも言える。とくにウーフの父親が「ねずみは、ねずみ一ぴきぶん、きつねはきつね一ぴきぶん、はたらくのさ。だれのなんびきぶんなんかじゃないんだよ。おとうさんはくまだから、くまの一ぴきぶん。ウーフなら、くまの子の一ぴきぶんさ。みんなが一ぴきぶん、しっかりはたらけばいいんだ。」と言った言葉は、子どものみならず、大人の心にも届くものであろう。

こうしたある意味で哲学的とも言えるようなモチーフを据えながら、併せてこの物語は幼児教育・小学校教育の教材としてもふさわしい要素を有している。すでに本稿で見てきたような「行って帰る」構想や同質のエピソードの反復、食べ物への関心、数遊び、歌謡的要素、オノマトペ、ひとりぼっちの境遇への共感など、幼児、児童が心を惹かれる多様な物語の要素が認められる。そのため、この物語の受容は、おそらくは四歳児くらいから可能であろうが、ただこの物語の奥行きは深く、それぞれの年齢に応じて受容のあり方には違いが生じているであろう。その意味では、たとえば昔話の「かさじぞう」が幼児にも親しまれつつ、小学校教科書にも掲載され、人の心の優しさ、あたたかさを理解する教材として採用されているのとも似通った面がある。

以上見てきたように、「くま一ぴきぶんは　ねずみ百ぴきぶんか」は、子どもの物語受容において、『くまの子ウーフ』の中でもとくに奥行きをもった作品として、多様な視点からの読みをうながす構造を有していると考えられる。

注）

1）木谷喜美枝「神沢利子」（『国文学　解釈と鑑賞』昭和58年11月、至文堂）95頁。
2）岩崎京子「解説」（『くまの子ウーフ』、昭和52年５月、ポプラ社文庫）186-187頁。
3）神沢利子「あとがき」（『くまの子ウーフ』、昭和52年５月、ポプラ社文庫）185頁。
4）『みんなと学ぶ小学校こくご二年上』（平成14年２月、学校図書）68頁。
5）『みんなと学ぶ小学校こくご二年下』（平成17年７月、学校図書）20頁。